令和六年（二〇二四）三月二十六日発行
『大倉山論集』　第七十輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

「親切第一」を掲げた企業家、星一

―星製薬株式会社における教育事業―

安士昌一郎

「親切第一」を掲げた企業家、星一

―星製薬株式会社における教育事業―

安士昌一郎

目次

はじめに
一　明治・大正期の医薬品業界概観
二　星一の軌跡
三　星一の企業家活動
四　大倉邦彦との交流
おわりに

はじめに

星製薬株式会社の創業者である星一（はじめ）は若くして米国のコロンビア大学で学び、帰国後は医薬品の製造販売を中心とした星製薬所を創業し、株式会社へ改組し、チェーンストア方式を取り入れ発展させました。また販売においては広告宣伝を活用し、消費者の耳目を集めました。販売網を築くにあたり、啓蒙教育活動の要素を取り入れました。企業経営の中で人材育成の必要性が浮上し、その為の教育機関を設立したというのが星一のケースです。事業経営の中で必要に迫られてスタートさせたという点で、いわゆる「功成り名を遂げた」企業家による慈善活動や社会貢献活動とは異なります。次に、事業経営と教育との関わりについてお話しします。組織を維持、発展させる上で不可欠となるのがコミュニケーションの充実です。経営者は従業員や顧客に情報を伝達し、自らのビジョンを利害関係者と共有することで事業経営を成功させます。特に明治から大正期の医薬品販売業においては、従業員、顧客共に医薬品に関する知識が充分とは言えず、彼らに商品の持つ価値を理解させることが重要でした。

なお、教育事業に投資した他の企業家の例としては二つのケースが挙げられます。塩野義三郎商店（現塩野義製薬株式会社）の二代目経営者、二代塩野義三郎は遺言により、薬学研究奨励を目的とした篷庵社を昭和二九年（一九五四）に設立しました。また武田長兵衛商店（現武田薬品工業株式会社）五代目当主、五代武田長兵衛は大正一一年（一九二二）ごろから経済的に困窮した学生を私財によって援助する育英事業を始め、その事業を引き継いだ六代武田長兵衛が「財団法人尚志社」を設立しました。これらの活動は将来世に出る人材への投資、あるいは慈善事業としての観点から行われました。また富山市の薬業者は明治二六年（一八九三）、寄付と市の補助金によって共立薬学校を設

立しました。

本講演では、主として大正期に活躍した星製薬株式会社の創業者であり、企業発展に教育事業を適用した実践者である星一の企業家活動を明らかにし、教育事業がコーポレート・アイデンティティ（企業文化を構築し、利害関係者と共有することで存在価値を高める戦略）確立、ひいては企業成長に関しどのように貢献したかについて論じました。なお、本講演ではコーポレート・アイデンティティを構成する理念・ビジョン、価値観や行動様式といった企業文化、シンボリズムの三要素[1]に着目し、教育事業がそれぞれの統一、浸透および形成にどう役立ったかについてお話しました。

本講演録の構成は以下の通りです。まず一章で星の活動背景を記述します。二章では彼の出生から教員時代、東京遊学、米国留学を経て企業家を志すまでを述べ、三章では製薬事業を設立し、株式会社化して規模を拡大させていった過程を述べ、教育事業についてお話しし、四章の結びにてこれまで明らかにした事実を検討し、星の企業家活動とその行動原理を考察します。

本講演録では、マーケティング活動やチェーンストア方式、そして教育事業推進の背景となった星一の行動原理がいかにして形成されたかにまず焦点を当てます。それによって推進された企業家活動を星製薬株式会社社報および彼自身や彼の支援者の著書、営業報告書、星薬科大学の大学史、そして彼の評伝などから読み解いていきます。

一　明治・大正期の医薬品業界概観

星一と星製薬株式会社のケースについてお話しする前に、明治・大正期に大きく変革した医薬品業界について概観

し、星製薬が成長した時代背景を述べます。

政府が西洋医学の本格的な導入を決定し、明治七年（一八七四）に医療制度や衛生行政に関する規定を定めた「医制」を発布し、医療用医薬品に西洋医薬（洋薬）が用いられるようになりました。国内での洋薬生産は行われておらず、当初は輸入によってのみ洋薬需要を賄っていました。小規模な製薬業者が国産化を試みたものの、粗悪品や不良品が大半であり、輸入品の優位を覆すことは出来ませんでした。政府は明治一六年（一八八三）、半官半民の大日本製薬会社を設立して国産医薬品の信頼性を向上させようとしましたが、明治末年になっても尚、国産品の品質は外国製品の水準に達する事無く、輸入品に依存する状況が続いていました。

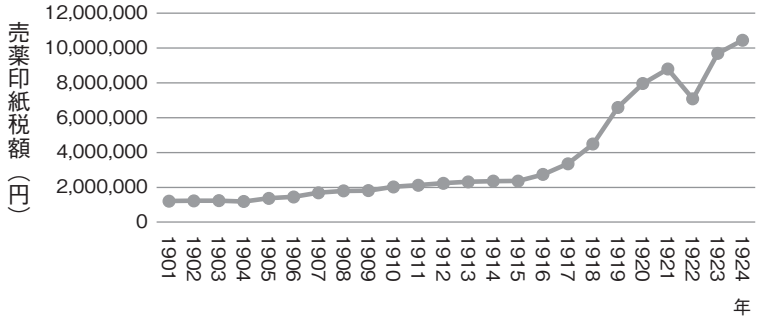
また明治九年（一八七六）、「薬舗開業試験」制度が施行され、既存の薬種商（医薬品販売業者）に仮免許が交付される一方、新規事業者は試験に合格しない限り、薬舗の開業が出来なくなりました。

一方、あらかじめ製造・調合されて市販されている薬、売薬に関する方針が転換されました。明治一〇年（一八七七）に制定された売薬規則では、売薬を無効かつ無害な製品と見做していました。しかし大正三年（一九一四）、売薬法が制定され、有効無害主義がとられることとなりました。売薬法では原材料が制限され、売薬業者の資格を定め、品質に関する規定を設け、検査制度を確立し、広告取締の規定を設け、輸出または移出に関する規定が設けられました[2]。

売薬の販売において品質と効能の保証が必要となったことは、製造者側のコスト増を招きました。しかし同時に、売薬の効能を期待する消費者からの需要増も見込めるようになりました。政府の方針転換とそれに続く売薬法の制定は、売薬の製造販売を始めて間もない星製薬に事業機会をもたらしたと考えられます。

【図二】に売薬印紙税額[3]の推移を示します。営業者数に関しては第一次世界大戦における医薬品相場の乱れや戦後

図一　売薬業界世界推移



出所：『衛生局年報』より作成。

恐慌などによってところどころ減少が見られるものの、売薬印紙税額の増加を見れば、全体として順調に伸びていることが分かります。

また、大正三年（一九一四）に勃発した第一次世界大戦はドイツからの医薬品輸入を途絶させ、薬価の急騰と医薬品欠乏を招き、市場は大混乱に陥りました。道修町で活動していた薬種問屋、武田長兵衛商店の社史にも当時の様子が記されており、

> 大部分の薬品は二〇％～三〇％高を示し（中略）相場が最も敏感に反応するといわれていた爆薬の原料グリセリンは、二週間ほどの間に一五八％高となり（中略）他の薬品でも高いものは三〇～四〇倍になった。[4]

とあります。この事態を受けた政府はまず「戦時医薬品輸出取締令」を緊急発令して医薬品の国外流出を防ごうと試みました。同時に医薬品の製造を奨励する為、衛生試験所に臨時製薬部を設けて医薬品の試作とその成果を官報によって公表し、国内製薬業者への指導を行いました。大正五年（一九一五）には、アセトアニリド、石炭酸、サリチル酸、アルカロイドなど「製薬指定医薬品」を製造する企業に対する損失補償と、払込株金の八％までの利益配当保証を十年間供与することで、大戦終結に伴う経済的反動の危機を補償して製薬企業設立を容易にする「染料医薬品製造奨励

法」を制定しました。更に大正六年（一九一七）には交戦国であるドイツの所有する特許権の制約を解除する「工業所有権戦時法」を公布しました。

【表二】からも分かる通り、第一次世界大戦期において、医薬品、医療材料の生産額が急増しました。この第一次世界大戦による市場の混乱と医薬品勧奨政策もまた、星製薬には追い風となったといえます。

表一：化学工場製産品（医薬・売薬・医療材料）生産額推移（単位：千円）

年	医薬	売薬	医薬＋売薬	医療材料
1909（明治42）年	N/A	N/A	7,166	398
1914（大正３）年	N/A	N/A	19,902	1,424
1919（大正８）年	15,809	23,566	39,375	3,207
1920（大正９）年	20,007	31,219	51,226	4,262

出所：『大正九年工場統計表』より作成。データが得られなかった部分についてはN/Aと表記した。

二　星一の軌跡

（一）生い立ち

星一は明治六年（一八七三）一二月二五日、福島県磐城郡錦村江栗（現在の福島県いわき市）に生まれました。幼名は佐吉であり、明治二六年（一八九三）、二〇歳の時に一と改名していますが、本論文では星一の表記を「星」に統一します。家族構成については、『星薬科大学八十年史』、「「星一」言語録（その3）星一の哲学」には兄弟姉妹の記述はありませんが、彼の長男である星新一が著した小説形式の伝記『明治・父・アメリカ』によれば妹と弟がいるとされています。妹の活動については不明ですが、弟である星三郎は工場長として星製薬株式会社の経営に携わって

おり、同社の教育部発足も後押ししたことが、『星製薬株式会社社報第六四号』に記述されています。[5] なお細菌学者の野口英世も明治九年（一八七六）、福島県にて出生しています。野口とは後述する米国滞在中に出会っており、星は彼を自社の顧問に迎えています。[6]

星家は三、四人の使用人を雇う裕福な農家で、父喜三太は後年県会議員などの公職に推される人物でした。喜三太は厳格で、かつ長男である星の将来に多大な期待をかけていました。

（二）教員時代と米国への憧れ

四年制の錦村立大倉小学校を卒業した星を、父喜三太は、「学校の先生にして、将来自分の跡を継がせようと」[7]しました。そのため、父喜三太の指示によって小学校の教員を養成する平町授業生養成所に入学しました。その六ヶ月後、四〇名中三番目の成績で卒業し、明治一九年（一八八六）、一三歳で平町小学校の教員となりました。この時の星は師範学校を卒業していない授業生でした。少年期に小学校教員を務めたという就業経験が、後に推進する啓蒙教育活動の原点となった可能性があります。

教員生活で星が用いた教科書は、その多くがアメリカの教科書の翻訳でした。アメリカの教科書が小学校教育の教材に採用された理由としては、自由主義が色濃く反映されたアメリカの教育制度を取り入れ、日本の画一的な教育の改善を図るためでした。これが米国流の考え方を人々に理解させることとなり、星が後年行った啓蒙教育活動の基礎ともなりました。

やがて、星は東京への遊学を希望するようになりました。その理由について明確に記した資料は得られませんでしたが、欧米の新たな文明や文化に触発され、それらに少しでも近づく為、首都で学問を学んでみたいという欲求に駆

られた結果と考えられます。

（三）東京への遊学

教員になって二ヶ月ほど経つと郡長に師範学校入学を勧められ、父もそれを望みました。しかし星は自分の望みである東京遊学を実現するために貯金を考えていました。結果として、星は自分の計画を郡長に打ち明け、下宿の必要がない学校に転任し、二年掛けて遊学資金を貯め、父を説得して許しを得るにいたりました。星は郷里で東京の様々な学校の規則集を前もって取り寄せ、調査していました。その結果、少ない学資と短い期間で卒業出来る、学んだものが直ぐ役立つ、各方面と接触できる高名な教員がいるという三つの条件を満たした、神田にある日本最初の私立の商業学校である私立東京商業学校（現ドルトン東京学園）の夜学に入学することを決めました。

東京へやってきた星は明治二四年（一八九一）、計画した通り私立東京商業学校の夜学に入学しました。私立東京商業学校は明治二二年（一八八九）、当時の内閣官報局と一橋大学の前身である高等商業学校の教授などが設立に関与した商業学校です。

「高きに過ぎず低きに失しない、所謂中等程度の商業學校を設立したい」[8]

という趣旨により開校された私立東京商業学校は、単なる業務の研修に留まらず、といって実業からかけ離れる事もないという点で、星製薬商業学校やその前身である星薬業講習会に通じるところがあります。

当時の校長は元曾我野藩士で官報局長を務めた高橋健三でした。高橋は後に大阪朝日新聞の論説委員、内閣書記官長を歴任した人物で、星との師弟関係は長く続きました。また、後に台湾総督府民政長官となった内田嘉吉も教員の一人です。

入学して間もなく、星は「將來何人にも頭を壓えられない事業家にならう[9]」と考えるようになり、それを実現する手段として「先進國の米國に渡り、アメリカの大學を卒業し度い[10]」とアメリカ留学を希望するようになりました。起業への志向は私立東京商業学校での教育によって触発されたと考えられます。また当時の小学校の教科書は多くがアメリカの教科書の翻訳であり、星はその内容に感銘を受けました。特に教師用の参考書にあった、屋根の上で遊んでいた二人の子供が落ちそうになり、友人である一人を助ける為にもう一人が我が身を犠牲にする、という話に心を動かされたようです。またそのころ、密航し、苦学の末アメリカの大学を卒業して帰国した人物の話が新聞に出ていた事もあり、渡米熱に拍車が掛かりました。星は商業学校二年の頃から渡米の決心を固め、米国に行って生活する方法を模索し始めます。

また星はこの頃、英語習得の為神田三崎町にある夜間学校にも通っていましたが、そこで自身と同様渡米を志す安田作也と知り合っています。彼は後に星が支援を受けることになる政治活動家、杉山茂丸の甥でした。星はアメリカに渡る前にも杉山と会っており、人生に関する様々な教訓を得ています。特に未知の物に対する姿勢については、杉山は、

一事件づつ精細に深く考慮せよ、考慮が圓熟したら、強度の忍耐と實行の力とを擧げて、善悪となく屹度遂行せよ[11]。

と語っています。星も、計画について熟考した後は思い悩まず最後までやり遂げることの大切さについて認識しており、自らの著書で

頭腦は第一番に働かざるべからず、手足を動かす前に判断を下さざるべからず[12]。

事を半分にて放置するは罪悪にして害虫と等し[13]。

と述べています。なお、星は大阪で高橋に再会した際、当時の在サンフランシスコ日本領事である珍田捨巳に宛てた紹介状を託されています。

（四）米国留学期間における思想形成

私立東京商業学校を卒業し、日本各地を旅行した星は明治二七年（一八九四）一〇月に米国サンフランシスコへ到着し、現地の福音会に身を寄せました。福音会とは明治一〇年（一八七七）一〇月、アメリカ在住の日本人クリスチャンによって組織された団体です。在米日本人団体として設立された組織で、宗教活動だけでなく、身よりのない在米日本人苦学生の救済活動に力を入れていました。宿泊所を経営しており、宿泊のみで一〇セント、食事三食で三〇セントであり、一カ月九ドルで生活出来ました。また星は渡米前、「自分は體だけが資本でこれからアメリカに行き、大學を卒業するつもりだから、絶對に病氣は出来ない」[14]と決意し、一二年間の米国滞在中、売薬を服用して病気の悪化を防ぐという習慣を身に着けました[15]。これが、星が売薬および製薬業界に注目するきっかけとなります。

紹介状の宛先である珍田捨巳は星と入れ違いの形で帰国していましたが、星には渡米後の計画がありました。サンフランシスコ到着時、彼は日本円にして三〇〇円超である一一五ドルを持っており、この資金で三、四ヶ月かけて語学を学び、現地の情勢をある程度把握してから仕事を始めて大学で学ぶ費用を賄うつもりでした。しかし渡米後間もなく、現地の日本人陶器商に貸した一〇〇ドルが倒産によって返済されず、一〇ヶ月分以上の生活費が失われました。当初の予定が完全に崩れた星は、土地柄も言語も覚束ない中、急遽職を求めることとなりました。

生活資金と大学の学資の為、星はスクール・ボーイとして働くことを決めました。スクール・ボーイとは当時サンフランシスコに存在していた労働慣習で、朝晩の家事のみの為に雇われ、日中は学校に通うというものです。雇い主

は主として、英語に堪能でない、体格面でも優れていない日本人や中国人を雇用してでも使用人の人件費を節約したい、裕福ではないが貧しくもない家庭でした。しかし当初、星の語学力は充分でなく、サンフランシスコの家庭環境も把握しておらず、家事手伝いそのものの経験も無かったことから失敗が続き、

「MR.O.D.Hoshi」[16]

「追い出されの星」[17]

とあだ名されるほど仕事が長続きしませんでした。失敗の原因は殆どがケアレスミスと思い違いによるものでした。それでも星は米国の大学で学ぶという当初の計画を諦めず、雇われてはすぐに解雇されるといったことを二十五回繰り返しました。[18] この二十五回追い出されたというのは名誉ある記録ではありませんが、裏を返せば実績がなくともひとまずは信頼された、とみるべきです。星の持つ熱意やひたむきさを感じさせるエピソードであると考えます。とはいえ、この状況を受けた福音会の日本人スクール・ボーイ達は、失敗続きの星の存在は彼ら全体の信用に関わり、日本人は役に立たないという風評が広がって自分達の雇用も脅かされると考え、星をスクール・ボーイとして紹介しないようにしようと決議したほどでした。しかし日本人苦学生からの糾弾の中でも星はスクール・ボーイを続けました。

星は渡米した当時、サミュエル・スマイルズの著した『自助論』[19]を友人から借りて読んでいました。同書では多様な成功者および偉人のエピソードを挙げ、努力と決意、知恵や理解力の重要性、教育のあるべき姿について語られています。この自助論の存在も、後に教育事業へ傾注した理由の一つと考えられます。またアメリカに着いて間も無く購入した古本の中の、

「私は何事かを為すであろう、そしてそれは世界に於ての或るもの」(I will do something and something in the world.)[20]

「死は来たれ、彼女は私が既に準備が出来ていることを見出すであろう」(Death may come, she will find me, I am all ready.)[21]

という二つの句は、星にとって後々までの指針となりました。

彼はその後、誰も行きたがらず、勤めた者が一人として長続きしなかった、相場よりも給料が安く待遇の悪い家庭を友人から紹介されました。待遇と給料については評判通りの家でしたが、星は「どんなことを言いつけられても実行しよう、絶対に口応えせずに一所懸命働こう」[22]と決意し、アメリカにおいて初めて雇用を打ち切られず、仕事を評価されて給料を受け取りました。一週間分の給料は一ドル二五セントでした。星は、「勇氣は曾て爲せしより來る」[23]とよく口にしていたと言われています。事の始めがどれほど困難であったとしても、必ず何かしらの成功を収めるべきであり、成し遂げた成功が次の行動を促す原動力になるのだという考え方は、星の人生の指針のひとつといえます。

彼はその家庭で四ヶ月間勤務して付近の小学校に四年生として入学しました。渡米後、星が学んできたのは家事全般の雑用と、そこで用いられる最低限の英語のみだったので、大学で学ぶ為に必要な語学を習得しようと考えたのです。この時星は二二歳でした。『星一評傳』には当時の学習様式についての記述があり、「教えるというよりも、研究が主で、生徒は家で、字も習い、詩も書き、數學もしてくるという具合だつた」[24]とあります。この小学校での三ヶ月間は、その後の星の学業に大きく貢献しました。初等教育ではあったものの、学ぶべき内容を授業内で詰め込むのではなく、自ら探し求め、考えることで理解を深めるという方式であったことがより教育効果を高めることとなりました。星が教育の在り方について

私は学問販売所ではない〝ほんとうの人〟を造る大学にしたい。〝誠の人間〟を造る大学にするつもりだ。学校設立の目的は人の必要を感じたからであります。[25]

と語ったのは、この時の体験故です。その後は雇い主の信頼を得るよう努め、特に星を高く評価したアペンジャー家から学資を援助するのでサンフランシスコの大学に行くよう勧められるほどになりました。

この、「追い出されの星」からの脱却は、星にとって忍耐力を身につける以上の意味を持っていました。スクール・ボーイとしてアメリカ西海岸の中流家庭を経験したことで、将来の日本の消費者像をイメージ出来たのです。

また前述した通り、滞米中の星は市販薬の服用で健康維持を図りましたが、これは彼独特の習慣ではありませんでした。アメリカでは一八五二年にアメリカ薬剤師会のフィラデルフィア大会で不良薬品の使用阻止が議題となり、一八八二年にはアメリカの薬局方である〝U.S. Pharmacopoeia〟の新版が公布され、同年に全米薬卸協会が設立されています。また一九〇六年には国内で氾濫する医薬品の監視と管理を可能にするワイリー法が議会を通過しています。これらを見ても分かる通り、星が滞在していた当時のアメリカの家庭には多様な市販薬が普及していました。『星一評傳』中にも

アメリカには當時頭の痛いのがすぐ直る薬や、風邪をひいた時に熱のすぐ下る薬（今のアスピリン錠）などが相當大衆化していた。[26]

との記述があります。星が起業の際、最初の商品として選択したアンモニア入りの湿布薬も一般的に用いられていました。この時の体験が、星製薬設立に大きく影響したといえます。

さて、スクール・ボーイの仕事に慣れた星は、同時に福音会に居る日本人の暮らしぶりに危機感を覚えていました。スクール・ボーイとして働いている日本人にはその日の暮らしが成り立つことで満足してしまい、向上心を喪失した者が見られました。これは無理からぬことです。コミュニケーションが満足にとれない外国にやってきて、どうにか仕事にありつき、生活の目途が立つまで頑張り通した上で、当初抱いていた志に従い更に冒険しようと思い立つ人は

稀だと思います。しかし、星はそんな稀な人物でした。彼は後に「怠惰も傳染性を有す、治療すべし」[27]と記す星はその治療法として、かつて新たな文化を学ぶ為に東京へ遊学したように、「早く東部のアメリカ文明の中心に行き、西歐文明の眞髄にふれて見度い」[28]と考える様になりました。そして明治三〇年（一八九七）にニューヨークへ到着し、コロンビア大学を受験し、入学が許可されました。

（五）コロンビア大学時代と起業経験

明治三〇年（一八九七）一〇月、コロンビア大学に入学した星は、政治経済科で政治学、経済学、統計学、歴史を学びました。特に統計学と経済学から得た知識は、星製薬の起業および成長の原動力となりました。四年在学した後でマスターオブアーツを取得しました。星は米国について、

> 私は歐羅巴の大學に學ばずして、アメリカの大學に學んだことを仕合せであつたと考えている。合衆國は古い歐羅巴と新しい東洋との間にあつて、學校、殊にコロンビヤ大學は自由、進歩的の教育であり、合衆國民の總べてが親切で、樂觀的で、進取的で、協力的であつて、私の今日あるは、ひとえにアメリカのおかげと喜び、感謝しているものである。[29]

と語っています。

在米中、星は日本語の新聞『日米週報』を発行しました。新聞社立ち上げについて、星は、「日米文化のため盡すところあらんとした。[30]」と語っていますが、それに加えて東海岸に居住する日本人が西海岸と比較して裕福で社会的地位もあり、新聞の購読者として期待できるという面もありました。また星は明治三二年（一八九九）、日米週報の記事に用いるインタビューの為に新渡戸稲造と交流しています。[31]星は新渡戸稲造と、敬虔なクリスチャンである彼の

妻については畏敬の念を抱いていたと『星一評傳』にあり[32]、夫妻の寛大さと厳格さに感銘を受けた事が記述されています。星自身がクリスチャンであったという記録はありませんが、教員時代に感動したという話の内容といい、キリスト教的思想に影響を受けた事は考えられます。

明治三三年（一九〇〇）、コロンビア大学在学中だった星は、後に衆議院議長となる大岡育造の要請を受け、欧州視察に同行しパリで開催された万国博覧会に参加しました。星はこの時、新渡戸稲造と再会しています。また博覧会開催をきっかけとして、同地で万国新聞記者大会が開催されることとなりました。星は日本の特派員代表として此処に参加し「日本の新聞、その過去と現在」というタイトルでスピーチを行い、好評を博しました[33]。この経験は、星に広告宣伝活動の重要性を認識させました。また、ニューヨークで杉山茂丸の紹介により伊藤博文と出会って彼の私設秘書となっています。更に、星はコロンビア大学を卒業した明治三四年（一九〇一）の八月から明治三七年七月まで農商務省の海外実業練習生という扱いになっています[34]。

卒業後は英語の月刊誌『Japan and America』を発行しましたが、経営は大変困難なものであり、明治三四年（一九〇一）に一時帰国して資金調達に奔走し、杉山茂丸の紹介で台湾総督府民政長官であった後藤新平から五千円を借りたり、米国農商務省から年九百円の補助金を支給されたりして事業を維持しましたが、経営難を脱することは出来ず、『日米週報』を知人に譲渡して帰国しました。

三　星一の企業家活動

（一）帰国後の模索と製薬事業選択の過程

明治三九年（一九〇六）年に帰国し、事業を行う為の資金を調達するためにアメリカ貿易商会横浜支店に勤務したり、韓国統監となった伊藤博文に随伴して朝鮮に行ったりした後、大衆性のある事業を始めようと思い立ち、一ヶ月間新橋から上野までの商店や商品を調査しました。朝の七時に新橋を出発して一軒一軒立ち寄り、一二時に上野に着き、昼食と休憩の後、来た道を引き返しながら通りの反対側の商店を調べるという、自身の目と耳、そして足を使った徹底的な調査です。その結果、三業種を候補としました。一つ目は外出には欠かせない消耗品を扱う下駄屋です。二つ目は同じく生活必需品を扱う金物屋です。金物屋について、星は米国滞在中、シモンズハートウェイという金物屋の販売制度を研究していました。そして三つ目が薬屋です。二節の（四）で述べた通り、星は滞米中、身体に異変を感じる度に薬を飲んでいました。市販薬はアメリカ、日本共に一般家庭へ普及しており、今後更なる需要増が見込まれていました。

そして少ない資本で始める以上、少資本かつ資金回収が早い事業を選ぼうと考えていた折、消炎、殺菌剤として使用されるイヒチオールを湿布薬として用いる研究に行き詰っており、四〇〇円出せばその研究と製品を譲るという提案を友人から受けました。イヒチオールにアンモニアを使用する事を知った星はアメリカの家庭で浸透していた湿布薬の存在を思い出し、杉山茂丸の周旋で、彼の知人だった後藤象二郎の次男、後藤猛太郎から四〇〇円の出資を受け、その資金でイヒチオールの研究成果と製品を得ました。その後、製品を薬種問屋に一六〇〇円で販売しました。一二

○○円を後藤、杉山との間で三等分し、イヒチオールを用いた製品に需要があることを知った星は、杉山の勧めもあってその製造に着手する事を決めました。

また、星は製薬事業について

何となれば藥の事業なれば、初め小さくも末は無限に大きくなり、且つ又世界に供給し得るからである。[35]

と『星製薬株式会社社報第七四号』にて語っています。後述する特約店向けの大会でも

良い藥は西蔵の山奥へも南米アンデス山の二萬呎の山奥へも運んで行くことが出来るのであります。（中略）藥には殆ど國境の制限がないと云うても宜いかも解りませぬ。[36]

と訴え、製薬事業の拡張性と、自社製品を扱う彼らが手にする利益の大きさと伸びを強調し、理念・ビジョンの統一を図っています。

（二）星製薬の設立とその経営理念

イヒチオールの研究を引き継いだ星は明治三九年（一九〇六）、星製薬所を設立し、現在の東京都江東区東部にあたる砂町で研究を始めました。この時、東京商業学校時代の人脈を利用し、原料の一部を無料で調達しました。

薬学の本を購入し、本で理解出来なかった所は薬局の薬剤師に訊ねました。アンモニアは強い臭気を発生させる事もあり、近所から反発を受けて退去を余儀なくされ、三田小山町に移住しました。約三ヶ月の試行錯誤の結果、薬局方に適合する製品を作る事に成功しましたが、硫黄を多く含む外国のイヒチオールと自主開発品を混合し、適切な硫黄含有量を含む良質な製品を作り出しました。これによって原価が五〇銭ほどの製品が三円で売れるようになりました。

イヒチオールの製造・販売事業を軌道に乗せた星は明治四一年（一九〇八）、代議士に立候補して当選し、そこで知り合った代議士片岡直温の助言と資金提供によって匿名組合を作り、事業規模を拡大させる機会を得ました。明治四四年（一九一一）、星は資本金五十万円の星製薬株式会社へと会社形態を改組し、「我が国の家族制度を株式会社に取り入れ、日本をして世界第一の製薬国にする」[37]という目標を掲げました。会社の目標については『星製薬株式会社社報第一号』にも記述があります。星は国内に質の悪い売薬と、その製造業者が数多く活動していることを問題視し、社会がそれを許容していることを強く非難し、

星製薬株式會社が賣藥の改良を以て生命とし、粗製賣藥の撲滅を絶叫しつゝあるのは決して偶然でないのである。[38]と、国家意識を交えて自社の正当性を主張すると共に、市場シェア獲得という目標を表明し、共鳴を呼び掛けています。これらは理念・ビジョンの統一および価値観の共有を図った行動といえます。

星は東京品川の大崎駅前に工場を建設し、日本で初めて企業としてモルヒネ、コカイン、キニーネを製造し、ホシチオール、ホシ胃腸薬、ホシ風邪薬等の多数の売薬も製造・販売しました。特にキニーネの製造に関しては、

大正五年、大阪の武田長兵衛氏が爪哇よりキナ皮十噸を輸入し（中略）キニーネの製造に着手されたのでありますが（中略）見込み無しとして其れを放棄することとなりましたので、當社が同氏輸入のキナ皮の殘り全部約九噸を買取り、研究の結果日本に於て始めてキニーネの製造に成功したのでありました。[39]

という記述が『星製薬株式會社とキナ及びキニーネ』にあります。武田長兵衛商店によるキニーネ製造に関しては同社社史にも記載されており、「キナ皮からのキニーネ塩製造は、大正五年と九年とに行なわれたが、いずれも失敗[40]」とあり、この時点での星製薬株式会社の技術的優位が示されています。そして、当時の星製薬株式会社では、研究部の人材としては「石津薬学博士」「豊島医学博士」の二名が挙げられています。[41]

また、星の活動は薬の町として知られる大阪道修町とも関連しています。『大阪製薬業史第二巻』中の「キニーネ禁輸省令と星製薬への回答」という節には、大正七年（一九一八）一〇月、内務省より発令された医薬品輸入取締に関するやりとりがあり、星から黒石組長へ「本邦製薬者として同業の諸氏と會見して卑見を申述度[42]」という通知があったことが記載されています。その時に提案された会見は別の活動との関連もあって見送られましたが、その際星は、

キニーネに就ては自分に於て古今東西に亘り充分に調査しあるに付御希望とあらば何時にても御参考迄に披陳するを辭せず[43]。

と、キニーネ製造に関する自社技術の優位性を主張するとともに、薬業界への積極的な協力を表明しています。

工場の敷地内には診療所、幼稚園、炊事場、図書館などの福利厚生施設が設けられていました。明治三六年（一九〇三）に従業員の要求を知る為の注意函を設置し、明治三八年（一九〇五）に自社の共済組合を設立して、従業員待遇を改善することで自社の業績改善を試みた武藤山治の労務管理法に通じるものがあります。武藤も明治一八年（一八八五）に米国へ留学しており、工場の見習い職工や学生寮の給仕として働きつつ大学で学び、帰国して鐘淵紡績会社の経営改善に努めた人物であり、星との共通点があります。

星製薬株式会社はまた、第一次世界大戦を契機として起きた医薬品の国産化政策の恩恵も受けました。政府は大正六年（一九一七）、阿片法の一部を改正し、製薬用の阿片払い下げに関する特例を認めました。星製薬は払い下げを許可された四社の内の一つであり、先述した通りモルヒネ製剤によって大きな利益を得ました。四社の中でも、星製薬株式会社は「台湾総督府のあへん払下げの特権も有していた。さらにキニーネについても翌七年に公布された「輸入取締令」に関する指定業者となって、キニーネ輸入の独占権も得[44]」ることとなりました。こうした官界からの特権

は同社に利益をもたらしましたが、これが後年阿片事件で損失を受ける原因ともなりました。

（三）シンボリズム形成と教育による販売網の構築

米国にいる間、新聞と雑誌の発行を手掛けたことで広告の重要性を学んだ星は、広告宣伝に多額の資金を投入し、「クスリはホシ」のキャッチコピーで消費者の耳目を集めました。また自商品の優位性を積極的にアピールしました。中でも特徴的な赤い缶を用いたホシ胃腸薬については、その容器が使用後も宣伝効果を持つことを、『星製薬株式会社社報第八四号』において「此美麗なる天興とも云ひつべき空罐が、如何に廣告的効果あるかを自覺せられ度き也[45]」と、特約店主の言葉を借りて強調しています。これは前述したキャッチコピーと合わせ、シンボリズムの形成を図る行為にあたります。そして販売組織として星チェーンストアを構築し、分配取次機関である県元、郡元売捌所を設置して支部長制度を作りました。また一町村に一店舗の割合で販売特約店を募りました。特約店になる事を希望する事業主は最初に二十五円を振り込み、星製薬株式会社が代金分の薬を送付するという方法を採りました。また一村に二以上の希望者がある場合はより貧しい方を採用した星の態度が、新しい特約店の主達を感動させたといわれています。

また、星は『星製薬株式会社社報第五九号』に「特約店各位の爲めに星薬業講習會を開始せんか[46]」というアナウンスを掲載し、大正一〇年（一九二一）、市郡元売捌講習会を開講して、会社の機構から社債、株式の説明、製薬事業、販売の過程を紹介し、アメリカの例を引用して講義を行いました[47]。講習会にはまた多数の専門家が同行し、星製薬の製品の宣伝ばかりでなく医薬品の製造設備から販売促進の為の営業活動に至るまで、網羅的な講座が開かれました[48]。この方法は地方の薬店の主人にとって新鮮な体験でした。多くの場合、特約店を募る際は店主を接待し、取引相手になるよう懇請するのですが、突然勉強会が開かれたわけです。店主達は困惑し、不満も持ちましたが、星の講義を聞

いている内に、「非常に偉くなつたような氣がして、賣藥に對して自信を持つのだつた」[49]とのことです。講義によって、医薬品販売業に対するモチベーションを刺激された結果といえます。

開催者である星も『星製薬株式会社社報第八三号』で

> 朝の九時半から開會し、午後からは又協議會を續けて、夕刻五時に閉會するまで、熱誠を以て御相談を聞いて下されたことは、謝するに言葉もありませぬ。[50]

と述べており、謝意と共に参加者の熱心さを表し、また自身の方針の正しさを主張しています。また社報第八十四号に

> 諸君は此大會に出席して、果して何を感じ、如何なる抱負を持つに至られたか（中略）忌憚なく發表していたゞき度いと思ひます。[51]

と反響を募集し、その結果、『星製薬株式会社社報第八六号』の特約店大会情報には特約店主達の意見や感想が掲載されました。その内容は

> 社長殿の御話には、感心仕候。以後は家内一同「親切第一」に仕るべく候。[52]
> ホシクスリは如何はしきものならんと、皮相に眺め居りたる處、社長の實に稀に眞摯なる御談話にて、藥及會社に對し、尊敬の念を生じ申候。社長の御希望に背かざる様、國家的觀念にて、大いに斯業に努力いたすべく候。[53]

といったものであり、星一および星製薬株式会社への信用と、売薬販売への自信と熱意が大会の中で醸成されたことを主張し、自社と特約店が認識を同じくし、共通の目標に向かって活動を継続する姿勢を強調して、価値観と行動様式の共有を呼びかけ、企業文化の浸透を図りました。チェーンストア方式を成功させる上でコミュニケーションの充実は不可欠であり、星が行った講習会はこの作用も果たしていたといえます。神保（二〇一六）「販売割当責任制の

導入とその背景―星製薬のケース―」によれば、明治四三年（一九一〇）時点で約七〇〇あった特約店数は、大正二年（一九一三）に四〇〇〇、大正六年（一九一七）に一五〇〇〇、そして最盛期の大正一二年（一九二三）では三五〇〇〇以上に達しました。

（四）理念・ビジョンとしての親切第一

積極的人道や善行為を意味して「親切」という言葉を用いた星は、「所謂義理は他動的消極的道徳心の表現で、社交の方便のみである」[54]として消極的な「義理」と比較し、事業を行う上での強みとして親切という考えを重んじるべきと説きました。彼は自らの経営哲学を『星製薬株式会社本領』としてまとめ、それを度々社報に掲載して従業員及び特約店員との共有を図っています。その第一条に

本社は親切第一を主義として營利事業を經營しつつ社會奉仕を爲し、其の並行の可能を世界に示さんとするにあり。[55]

と書きました。それは、『星製薬株式会社本領』一六条に記された「親切の前には敵なし。親切は世界を征服す。[56]」という言葉に現れています。

「「星一」言語録（その一）」にはまた、「学問に親切なれ[57]」という文言があります。これに関して、星は

世は益々科学的経営の時代となったのである。学問なしに、世渡りが困難になって来た。従って勤勉、努力も科学を基礎としたる勤勉、努力にあらざれば人の先に進むことはできなくなったのであるから、学生は勿論何人も学問に精をださねばならぬ。[58]

と語っています。また星は『星製薬株式会社社報第九〇号』でも

人と競争して商賣して居る間は、學問がなければいかぬ。自分に學問と云ふものなしには人と競争しても勝つことは出来ない。[59]

と述べています。当時は取り扱う商品の種類、数共に増え、販売店の数も増加し、その管理が困難なものになっていきつつありました。そして医薬品の製造にも高い技術力が必要とされます。学問に親切なれという一節は、こうした複雑化する企業経営に適合する為に何が重要かについて説いたもので、努力や勤勉も学問無くしてはその効果を発揮し難いとし、成功の条件としての学業の価値を強調しています。親切第一は、理念・ビジョンの統一および企業文化の浸透を企図した星一の造語といえます。

（五）教育による人材形成と企業文化の浸透

星は事業を成長させるにあたり、「施設や機械は金を出せばすぐ買えるけれども、人の育成には年月を要する[60]」という考えを持っており、従業員教育への投資が作業能率を向上させ、収益も増加させると考えていました。星製薬株式会社の『星製薬株式会社本領』には

思慮あり、忍耐あり、同時に實行力のある構成的人物たれ。思考を練れ。人間の頭脳は使ふに從ひて益々豊富たり。[61]

事の成否は終局にあらずして寧ろスタートにあり。良き計畫は進歩の母なり。組織は支配に先つ。[62]

とあります。また『星一評傳』にも「よき組織も、よき思考も教育より生れる。生産も、販賣も教育の一環である[63]」とあり、教育こそ事業経営の中枢であると確信していたことが分かります。

『星薬科大学八十年史』によれば、星は星製薬株式会社を設立した直後、社内に教育班と名付けた教育部門と図書

館を設けています。更に大正三年（一九一四）、教育班を教育部に改組し、七〇余名の生徒を集めて総合的な人材育成を実施しました。生徒は小学校を三年で終えた人間および社会人を含んでいました。また午後五時から七時までを割いて夜間補習教育を実施しました。[64] その内容は、『星製薬株式会社社報第六五号』によれば、「丙組」の教科として「修身、算術、讀方、綴方、書方」[65]です。これを見る限り専門的な教育ではありませんでした。これらは従業員教育の為であり、特約店教育とは異なりますが、教育事業の一環であり、学問が重要であるという星の主張に一貫性を持たせる活動といえます。

また星の教育に関する活動は海外にまで及んでいます。大正九年（一九二〇）、星はドイツ政府に同年の総利益金の約五・三％である八万円[66]を、研究費として寄付しています。円建てとしたのは、当時ハイパーインフレーションが起きていたドイツの経済状況を鑑みてのことです。第一次世界大戦後のインフレで研究が困難となった化学者達への援助が目的でした。ドイツ政府は寄付金をもとに学術相互扶助会を作り、それがきっかけとなって他国からも研究資金が集まりました。星の寄付はまた、ドイツ人の日本人への反感を和らげ、日本人留学生の学校入学や工場見学を実現させる助けとなりました。これは星の技術導入戦略の一環であると考えられます。更に星は大正一一年（一九二二）、『星製薬株式会社社報第九四号』にて、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランスを歴訪して最新の製作機械を輸入することと、本社からの留学生派遣を発表しており、積極的に海外への働きかけを行っていることが分かります。[67] 日本をして世界第一の製薬国とするという自社の設立趣旨に沿うには、海外の最先端技術を積極的に取り入れる必要があり、ドイツへの寄付がその足掛かりとなりました。またこの寄付は、設立趣旨に忠実であるという自らの姿勢を示し、理念・ビジョンの統一を図る行為だったといえます。

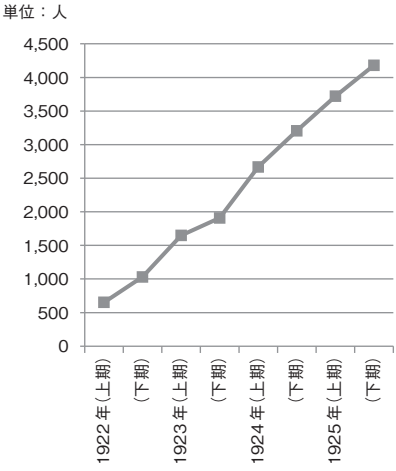
また四節の（三）でも述べた通り、大正一〇年（一九二一）、教育部を発展させた市郡元売捌講習会が星製薬本社

および同年八月に完成した星製薬商業学校寄宿舎講堂で行われました。大崎の工場近くに建設された教育施設は、六棟の校舎で五〇〇人程度、講堂は三〇〇人程度を収容できる規模を持っていました。

二週間の間、星は彼らに粗食を出し、雑用をさせる傍らで自ら講義し、また医学や薬学、社会問題、政治問題の専門家を招いての講義を提供しました。当初不満を抱いた人々も期間が終わる頃には最新の薬学や商業の知識を備え、家族や従業員に体験を語って聞かせました。この元売捌講習会は星薬業講習会となり、特約店の店主や店員に価値観や、行動様式を含めた科学的経営法を教授する役割を担いました。

【図二】に講習会および商業学校卒業者数の累計を示します。講習会は大正一〇年（一九二一）一〇月から開催されました。図に示した通り、年間一定数の卒業者を輩出しています。大正一一年（一九二二）には商業学校での教育も始まりました。講習会は昭和五年（一九三〇）二月で終了し、その後は商業学校のみでの教育となりました。卒業者は星製薬の特約店を形成する人材となり、企業文化の浸透にも貢献しました。

図二：講習会・商業学校卒業者数



出所：『星製薬営業報告書』より作成

（六）星製薬商業学校とその経営的意義

チェーンストアの成功もあり、星は人材育成が全てに優先するという信念を抱いていました。大正一一年（一九二二）、それまで行ってきた講習会をより組織立ったものとすべく星製薬商業学校を開校しました。設立に際し、星は薬種商試験

の為の準備と、薬局に近代的経営術を学ばせることの重要性を主張しました。開校当初、「修学後二カ年以上星製薬の製品の販売に従事するという条件ではあるが、月謝、寄宿舎費、食費、文具まですべてを会社が負担」[68]しました。この投資は、理念・ビジョンの統一および企業文化の浸透を促進して各特約店の販売店員の質を高め、かつ店舗数を増加させました。

【表二】に星薬業講習会および星製薬商業学校参加者の試験合格率を示します。学校設立の目的の一つが達成された証明といえます。

星製薬商業学校では講習会同様、製造から販売に至るまでの薬品知識に加え、政治、社会、商業道徳についての講義が行われました。当時の星製薬株式会社における教育システムでは、「未成年教育として六カ月卒業の本科生」と「成人教育として二週間で終了する、従来の星薬業講習生」という二つのコースが並行して開設されており、共に短期間で能率的な教育を施すことに主眼が置かれ、地方特約店の店主、店主の家族、従業員が主に入学しました。

表二：薬種商試験合格率

1936年度	受験者総数	合格者数	合格率（%）
受験者	535	99	18.5
本校受験者	54	25	46.3
本校外受験者	481	74	15.4
1937年度			
受験者	516	94	18.2
本校受験者	59	36	61
本校外受験者	457	58	12.7

出所：『星薬科大学八十年史』167頁。

【表三】に星製薬商業学校カリキュラムを示します。星製薬商業学校では専門家を招いての講義に加え、修身と共に「星氏哲理」という科目が置かれました。星による共通認識の周知徹底が行われていた事が示されています。星製薬株式会社の営業報告書には学校の履修者、講習会の修了者が記載されていました。また大正一一年（一九二二）下期から大正一四年（一九二五）上期までの営業報告書には「親切部」という項目が確認できました。彼の経営理念が一組織として具現化されていることが分かります。

表三：星製薬商業学校カリキュラム（この他にも臨時特別講演あり）

科目	備考
修身	人倫道徳の要領、商業道徳
星氏哲理	原理および応用
商事経営学	
薬学	薬品学、日本薬局方、薬物鑑定
法規	商法、総則、手形法、会社法、薬物関係諸法規
解剖及生理	原理および実験
商品	重要化学工業製品の性質、品位、鑑識、売買、慣習、荷造その他
商業地理	大意（日本および外国）
経済	経済学大意、財政学大意
統計	統計学大意および統計技術
商業及商事要項	売買および市場、金融、運送、寄託、保険、売買実務一般
商業簿記	普通式、カード式、ルーズリーフ式
商業文	往復文、報告文、電文
商業英語	読方、読解、作文、会話
商業算術	暗算、珠算、筆算
体操	兵式

出所：『星薬科大学八十年史』151頁。

なお、この星製薬商業学校を基礎とした星薬学専門学校が昭和一六年（一九四一）に設立され、昭和二五年（一九五〇）に星薬科大学となりました。星が人材育成の重要性について語った「一に人、二に人、三に人」[69]という言葉は星薬科大学にも継承され、『星製薬株式会社本領』の第一条に記された「親切第一」といった、人材育成を最も重要視した星の言葉が今日でも教育理念に用いられており、影響力の大きさを知ることが出来ます。

また、星の教育を受けた人々は阿片事件に際し、星製薬の維持に力を尽くしました。特約店の店主達については

> 強制和議を成立せしめた努力は実に空前のものであった。二〇キロも三〇キロも山道を歩いて受持区域の委任状を集めるという努力は、製薬会社とその会社の製品を販売する薬店というだけの、単なる関係からは説明できないものである。[70]

という記述があります。この箇所からは、彼らが星製薬との取引に満足しており、その継続を強く望んでいたことが読み取れます。また、設備投資の急拡大で予測された成長も、将来の利益を期待させました。これらは教育への投資によりコミュニケーションが充実し、コーポレート・アイデンティティの構成要素のうち、特に理念・ビジョンの統一と企業文化の浸透がチェーンストアの中で図られていた結果といえます。

四　大倉邦彦との交流

この章は講演内容には収録されていませんが、教育者あるいは啓蒙活動家としての星一を理解する上で重要と考えましたので、追加で記述します。

事業発展において教育を重視した星ですが、彼は杉山茂丸だけでなく、大倉洋紙店の経営者であり、大倉精神文化研究所の創立者でもある大倉邦彦とも交流しています。同研究所には昭和八年（一九三三）から昭和一一年（一九三六）まで星が送った葉書が保存されています。内容は、大倉の著書『感想』を贈られたことについての感謝です。本章では『感想』の中から、星と関連のあると考えられる大倉の文章を紹介します。『感想（其八）』では

教育学や倫理学は単独に学として成立するものではない。即ち哲学、宗教の派生として見るべきものである。[71]

とあり、また『感想（其九）』では

十八科目を雑然と並べ立て、一時的記憶を強制して、それ等に統括一貫したる指導原理を与へないのが、現今中等教育の大欠点である。[72]

とあります。教育現場における一時的記憶の強制と一貫した指導原理の不十分さは当時から指摘されていたようです

が、翻って星製薬商業学校のカリキュラムを見れば、星の考える原理と医薬品販売事業のスキルセットを並行して提供しており、大倉の問題意識に対する解の一つと捉えられます。

更に『感想（其十）』では

人間の生活から遊離した学問を、概念の商品として取り扱つて居る学究者が少くない。それは、学問の堕落である。之を救ふには、学界以外の人々が、改善すべく見守つて居なければなるまい。[73]

とあります。これは「学問販売所ではない〝ほんとうの人〟を造る大学にしたい」と述べた、星の教育の在り方についての考えと一致するものです。星から大倉へ送られた葉書からは、書籍を贈呈されたことへの感謝以外の記述は見当たりませんので、星が大倉の言葉に影響された、あるいはその逆があったという明確な証拠は発見できませんでしたが、「教育に精神的な要素を付け加えるべきである」「研究者以外の人物が教育を改善し得る」という二点では通じるものがあり、その意味では星、大倉の間に共通項を見出せます。

おわりに

教育事業へ経営資源を投じてコミュニケーションを充実させ、コーポレート・アイデンティティの構成要素である理念・ビジョン、企業文化、シンボリズムの統一、浸透および形成を果たして企業を発展させることを、星製薬株式会社とその創業者星一という事例によって示しました。

製造能力と高い技術力を有していた星製薬は、コーポレート・アイデンティティの確立によって強力な販売網と、それを構築する人的資源の調達に成功したといえます。

星は日本全国で三万に達する特約店をチェーンストア方式で展開して、医薬品販売事業を隆盛に導きました。本稿では星一の企業家活動を分析し、考察することによって、彼が教育事業を重視するようになった理由と、啓蒙教育活動が企業発展に与えた影響を明らかにしました。

星に影響を与えたものは多くあります。その端緒となったのは教員生活で使用した米国の教科書でした。星は西洋から入ってきた新しい文化への憧れを募らせ、新たな知識を求めて国内の文化的中心地である東京への遊学を熱望するようになりました。米国への憧れと知識欲が、星の企業家活動の原点でした。

明治二七年（一八九四）、サンフランシスコに到着して生活費と学費を調達することになった星は、職場や学校との交渉を行うことを学び、コロンビア大学に在学して政治学、経済学、統計学、歴史を学びました。星は学費調達の過程で米国の中流家庭を観察し、その時に得た見解は後に起業する際の助けとなりました。また出版社を経営して雑誌を発行した際に、広告の重要性を認識しました。この認識が、星製薬株式会社を成長させる上での足掛かりとなりました。

明治三九年（一九〇六）に帰国した星は、売薬を扱う星製薬所を設立し、明治四四年（一九一一）には自社を株式会社化しました。広告宣伝に多額の資金を投入し、消費者の耳目を集め、販売組織としてチェーンストア方式に則り特約店を募りました。その際用いたのが教育事業です。講習会を開いて自社製品の優位性や製薬事業の持つ社会的意義を訴えて、特約店主の信頼を獲得し、共通認識の創造と周知徹底を実現しました。

星は精力的かつ感激家であり、多くの事物に感銘を受け、多くの人々を感化しました。彼は米国から学んだチェーンストア方式に啓蒙教育活動の要素を加えて成功を収めました。教育への熱意は特に大きく、阿片事件などの窮地においても断念することはありませんでした。

一代で企業を立ち上げ、全国に販売網を作り上げ、代議士としても活躍したマルチタレントの人物といえます。教育事業を学問に対する「親切」と位置づけ、複雑化するビジネスに適応する為の手段として重視しました。また教育部の設置や福利厚生施設の充実など、従業員へのケアにも努め、人材重視の姿勢をアピールしました。

教育事業は、特約店の質を高める上で大きな効果を発揮しました。講習会および商業学校に特約店の店主や子息が入学し、薬学と経営の手法を学び、自商店で星製薬の製品を扱うことで、星製薬と特約店双方に利益をもたらしました。結果として、教育事業への投資は販売促進に繋がり、数多くの売薬業者の中でも星製薬株式会社を際立った存在に変え、発展へと導きました。

「日本をして世界第一の製薬国にする」為に、星は当時最先端であったドイツの化学界に寄付を行うことで、ドイツ化学界の技術を効率的かつ円滑に取り入れ、自社の優位性を確固たるものとする方策をとりました。これは自社の理念と、技術獲得への積極性を産業界に印象付けました。

星が行った製薬企業の立ち上げ、および教育事業への注力は、技術発展の面で先進国に追いつこうとしていた当時の日本にとって大きな意味を持ちました。

（著者付記）令和五年（二〇二三）四月十五日の大倉山講演会における本講演録は、平成三〇年（二〇一八）三月に刊行された学会誌『VENTURE REVIEW』No.31に掲載された拙論文「企業経営における教育事業」を元にしている。また講演後に大倉精神文化研究所より提供された資料を調査した結果を加筆した。

【謝辞】

本講演録の執筆にあたり、調査にご協力頂いた星薬科大学の方には大変お世話になりました。また星一に関する書簡および書籍をご提供いただいた大倉精神文化研究所の方にも御礼を申し上げます。

注

(1) 諸要素については、井上邦夫「コーポレート・アイデンティティ再考」(『経営論集』第八〇巻、東洋大学経営学部、二〇一二、七三～八六頁)を参考にした。

(2) 厚生省医務局編『医制百年史』(株式会社ぎょうせい、一九七六)二一八頁。

(3) 売薬製造業者が、製品の定価の十パーセントを支払って売薬印紙を購入し、製品に貼付するという形式で納められる税。

(4) 武田二百年史編纂委員会編『武田二百年史(本編)』(武田薬品工業株式会社、一九八三)二二三頁。

(5) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第六四号』(星製薬株式会社、一九一九)五頁。

(6) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第一号』(星製薬株式会社、一九一三)一頁。

(7) 星薬科大学史編纂委員会編『星薬科大学八十年史』(学校法人星薬科大学、一九九一)八頁。

(8) 澁木直『東京商業学校五十年史』(東京商業学校、一九三九)三四五頁。

(9) 大山恵佐『努力と信念の世界人　星一評傳』(共和書房、一九四九)二三頁。

(10) 右同書、同頁。

(11) 杉山茂丸『百魔[正篇]』(大日本雄辯會、一九二六)一一四頁。

(12) 星一『科學的經營法の眞諦』(星製薬商業學校、一九二三)二六頁。

(13) 同書、二三頁。

(14) 前掲注9『星一評傳』四二頁。

(15) 前掲注7『星薬科大学八十年史』八五頁。
(16) 前掲注9『星一評傳』四八頁。
(17) 前掲注7『星薬科大学八十年史』九頁。
(18) 前掲注9『星一評傳』四八頁。
(19) 当時の翻訳本のタイトルは『西国立志編』。
(20) 前掲注7『星薬科大学八十年史』六頁。
(21) 同書、同頁。
(22) 同書、九頁。
(23) 前掲注9『星一評傳』二八頁。
(24) 同書、五〇頁。
(25) 三澤美和「「星一」言語録（その二）」（『薬史学雑誌』Vol.24 No.1、日本薬史学会、一九八九）一一五頁。
(26) 前掲注9『星一評傳』一一八頁。
(27) 星一『科學的經營法の眞諦』（星製薬商業學校、一九二三）三七頁。
(28) 前掲注9『星一評傳』五一頁。
(29) 星一『哲学　日本哲学』（学而会書院、一九四九）一頁。
(30) 同書、三頁。
(31) 三澤美和「新渡戸稲造と星一の交流」（『薬史学雑誌』Vol.47 No.2、日本薬史学会、二〇一二）一五五頁。
(32) 前掲注9『星一評傳』二一〇頁。
(33) 前掲注31「新渡戸稲造と星一の交流」一五五頁。
(34) 農商務省商工局『海外實業練習生一覧』（農商務省商工局、一九一四）二四頁。
(35) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第七四号』（星製薬株式会社、一九二〇）一頁。

(36) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第八三号』(星製薬株式会社、一九二一) 三頁。
(37) 前掲注7『星薬科大学八十年史』一三頁。
(38) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第一号』(星製薬株式会社、一九一三) 二頁。
(39) 星製薬株式会社『星製薬株式會社とキナ及びキニーネ』(星製薬株式会社、一九三四) 九頁。
(40) 前掲注4『武田二百年史(本編)』二五一頁。
(41) 大塚浩一編『星の組織と其事業』(星製薬株式会社、一九二三) 七頁。
(42) 大阪製薬同業組合大阪製薬業史刊行会編『大阪製薬業史 第二巻』(大阪製薬同業組合事務所、一九四四) 四八二頁。
(43) 同書、四八二～四八三頁。
(44) 西川隆『くすりの社会誌　人物と時事で読む三三話』(薬事日報社、二〇一〇) 六八頁。
(45) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第八四号』(星製薬株式会社、一九二一) 五頁。
(46) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第五九号』(星製薬株式会社、一九一九) 三頁。
(47) 前掲注7『星薬科大学八十年史』年表では一九二〇年開催となっているが、大学史本文、および第二十回営業報告書では一九二一年開催となっているので、本稿でも一九二一年開催とした。
(48) 前掲注7『星薬科大学八十年史』九二頁。
(49) 前掲注9『星一評傳』一三二頁。
(50) 前掲注36『星製薬株式会社社報 第八三号』一頁。
(51) 前掲注45『星製薬株式会社社報 第八四号』五頁。
(52) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第八六号』(星製薬株式会社、一九二一) 二頁。
(53) 同書、同頁。
(54) 前掲注46『星製薬株式会社社報 第五九号』一頁。
(55) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第一〇四号』(星製薬株式会社、一九二二) 四頁。

(56) 同書、同頁。
(57) 三澤美和「「星一」言語録（その一）」（『薬史学雑誌』Vol.23 No.2、日本薬史学会、一九八八）一〇一頁。
(58) 同書、同頁。
(59) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第九〇号』（星製薬株式会社、一九二一）七頁。
(60) 前掲注7『星薬科大学八十年史』八六頁。
(61) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第一〇四号』（星製薬株式会社、一九二二）四頁。
(62) 同書、同頁。
(63) 前掲注9『星一評傳』一五八頁。
(64) 前掲注7『星薬科大学八十年史』八七頁。
(65) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第六五号』（星製薬株式会社、一九一九）五頁。
(66) 二百万マルク相当。
(67) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第九四号』（星製薬株式会社、一九二二）一頁。
(68) 前掲注7『星薬科大学八十年史』一二三頁。
(69) 星製薬株式会社『星製薬株式会社社報 第一二〇号』（星製薬株式会社、一九二四）一頁。
(70) 前掲注7『星薬科大学八十年史』一七頁。
(71) 大倉精神文化研究所編『大倉邦彦の『感想』』（大倉精神文化研究所、二〇〇三）一四三頁。
(72) 同書、一六六頁。
(73) 同書、一九六頁。